

保育学生による地域子育て支援の取り組み

—2013 年度活動報告—

A Community Parenting Support Program by Students in Early Childcare

Practical Training School: A Report of the Activity 2013

幼児教育学科

松 本 希
田 中 誠
澤 津 まり子
鎌 田 雅 史
秋 山 真理子
笹 倉 千佳弘
柴 川 敏 之
Z.山田 章 子
山 根 薫 子

はじめに

本学幼児教育学科では、子育て支援を目的とした学生ボランティアグループG B A (Girls and Boys Be Ambitious の略、以降G B Aと記す。)を結成し、2013年度で8年目を迎えた。G B Aの主な活動は、「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」と「学外就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～^{注1)}」の開催であり、過去7年間の取り組みについては既に報告済みである¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

昨年度の報告では、今後の課題として、「増加する参加者への対応と安全確保」、「学生間の協力体制」、「著作権及び死を扱うプログラムの扱い方」の3点を挙げた。それぞれの課題に対して、もう少し詳しい説明を加えておく。

「増加する参加者への対応と安全確保」という課題は、様々な場面を想定した危機管理マニュアルの作成や、参加者の増加に伴う学生スタッフの不足・子ども一人あたりの遊ぶスペースの減少・遊ぶおもちゃの不足・保護者への配布物の不足・受付での待ち時間の増加・迷子の増加等の問題のことである。

「学生間の協力体制」という課題は、学生の係の決定時に、自分の係とその他の係との柔軟な関係性を自覚し、グループとして、あるいは全員が、「やんちゃキッズ」を通して様々な経験ができるように配慮することである。

「著作権及び死を扱うプログラムの公演の扱い方」という課題は、原作が明確に存在する場合、パネルシアターやオペレッタで、どこまで内容の変更が許されるのか、また、死を扱うオペレッタをどのように表現するのか、ということである。

本報告は、上記のような課題解決を念頭においてすすめた、2013年度の地域子育て支援の取り組みについて、経過及び結果をまとめたものである。

注) 今年度より、今まで使用していた「出前就実やんちゃキッズ」の名称を、「学外就実やんちゃキッズ」に変更している。

1 活動内容

1) 「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」

「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」の実施は今年で6年目を迎えた。年間の活動回数は昨年より1公演減らした8回である。例年通り「やんちゃキッズ」は、前半はパネルシアター・リズム体操・オペレッタ・手遊びを行い、後半は様々な遊びを行うことのできる交流広場で構成している。公演内容及び参加人数は、表1に示す。

表1 就実やんちゃキッズ活動内容

日時	公演演目	参加人数	学生数
第1回 4月20日	パネルシアター「どうぶつえんへいこう」 リズム体操「ばわわぶたいそう」*健康・保健関連 オペレッタ「3びきのこぶた」、幕間に手遊び、交流広場	大人 151人 子ども 166人	72人
第2回 5月25日	パネルシアター「あわあわ手あらいのうた」*健康・保健関連 リズム体操「ぐるぐるどっかーん!」 オペレッタ「うさぎとかめ」、幕間に手遊び、交流広場	大人 138人 子ども 164人	79人
第3回 6月22日	パネルシアター「どんないろがすき」 リズム体操「エビカニクス」*健康・保健関連 オペレッタ「おおきなかぶ」、幕間に手遊び、交流広場	大人 180人 子ども 239人	64人
第4回 9月14日	パネルシアター「暑さに負けない4つの約束」*健康・保健関連 リズム体操「ぼよん行進曲」 オペレッタ「おむすびころりん」、幕間に手遊び、交流広場	大人 178人 子ども 208人	39人
第5回 10月19日	パネルシアター「秋をみつけにいこう!」 リズム体操「ドンスカパンパンおうえんだん」*健康・保健関連 オペレッタ「ももたろう」、幕間に手遊び、交流広場	大人 129人 子ども 149人	37人
第6回 11月19日	パネルシアター「ねこのおいしゃさん」*健康・保健関連 リズム体操「あ・い・うー」 オペレッタ「バトくんと約束～交通ルールを守って、安全に過ごそう」 幕間に手遊び、交流広場	大人 131人 子ども 166人	57人
第7回 12月16日	パネルシアター「あわてんぼうのサンタクロース」 リズム体操「ハッピージャムジャム」 オペレッタ「サンタさんのクリスマスイブ」幕間に手遊び、交流広場	大人 98人 子ども 113人	42人
第8回 1月25日	パネルシアター「北かぜとお日さま」 オペレッタ(リズム体操含む)「みさちゃんのはみがき」 幕間に手遊び、交流広場	大人 人 子ども 人 未定	人 未定

* 第4回の学生数は、2年生が実習で不在のため1年生のみの参加となっている。

昨年度、G B Aの活動は平成24年度岡山県備前県民局協働事業に採択された。申請課題は「保育学生が行う支援活動を通して子どもから派生する家族みんなの健康づくりの推進」であり、昨年度の「やんちゃキッズ」のテーマを「子どもと一緒に健康づくり」とし、「健康・保健」に関する内容を盛り込み実施した。具体的には、基本的生活習慣の食事、睡眠、着脱衣、排泄、清潔等を視覚的及び体感できる指導教材的なパネルシアター、リズム体操

及びオペレッタを実施した。加えて、交流広場では、身長・体重計を準備し、希望者には測定を行い、自分の体のチェックができるコーナーを設けた。これらの取り組みは、保護者アンケート調査の結果から好評であることがわかったため、引き続き平成25年度の「やんちゃキッズ」のテーマを「子どもと一緒に健康づくり」とした。しかしながら、備前県民局の公募制協働事業は新規性を求める特質があるため、今年度は応募しなかった。一方で、今年度9月からの「やんちゃキッズ」は、厚生労働省が実施している「学生によるオレンジリボン活動」に参加した。本活動の趣旨に賛同し、近い将来親になりうる学生に虐待予防のための啓発と「やんちゃキッズ」に参加する保護者への相談窓口の提示、「やんちゃキッズ」への参加を通して子連れで参加できる場の提供等を目的とし、本団体の活動主体とした。学生は、図1に示す通り、オレンジリボンを腕につけて「やんちゃキッズ」に参加し、オレンジリボン活動の広報を担った。



図1 オレンジリボンの装着

ここ数年、参加者の増加に対する対応が課題となっていたが、今年度は昨年度と比較して減少傾向にあった。

図2～5は、今年度の「やんちゃキッズ」の様子を示す。



図2 手遊び



図3 パネルシアター



図4 リズム体操



図5 オペレッタ

2) 「学外就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」

「学外就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」(以降、「学外」と略)は、学内で実施する「やんちゃキッズ」に参加しにくい地域の親子を対象に、子育て支援の輪を拡大するとともに、学生がその地域の子育ての状況を理解することを主な目的として実施している。本活動は、G B A 発足以来の恒例行事となっており、夏休みや冬休みの長期休暇を利用して行っている。本学幼児教育学科は、2年生が7月から長期学外実習のため、夏休み以降に行われる「学外」は、1年生を主体とした公演である。

今年度より、昨年まで用いていた「出前就実やんちゃキッズ」から「学外就実やんちゃキッズ」へと名称を変更した。『出前』の言葉の意味やイメージのため、一年を通して地域で行われる子育て支援イベント参加への問い合わせが後を絶たないためである。前述した通り、「学外」は長期休みを利用して行っている。本団体の構成員は学生であり、授業優先の姿勢は本学科教員の一致した見解であるため、外部機関への周知も考え、変更に至った。

今年度の「学外」は、2か所で実施した。開催場所は和気郡和気町、瀬戸内市長船町であった。公演の具体的な内容及び参加者人数は、表2に示した。

表2 学外やんちゃキッズ活動内容

日程	会場	公演演目	参加人数	学生数
9月17日 (火)	和気郡和気町 和気町本荘地区 公民館	パネルシアター「暑さに負けない4つの約束」 *健康・保健関連 リズム体操「ぼよん行進曲」	大人 46人 子ども 56人 保育園児 78人	44人
9月18日 (水)	瀬戸内市長船町 ゆめトピア長船	オペレッタ「おむすびころりん」 幕間に手遊び、交流広場、子育て相談コーナー	大人 60人 子ども 74人	44人

公演の基本構成は、学内で行う「やんちゃキッズ」と概ね同様であるが、各地域の担当者の要望に合わせて実施した。今年度の開催場所の決定は、両会場とも担当者からの依頼があり、本団体の開催時期等の希望と合った場所とした。和気町は初瀬保育園及び和気町児童クラブ、瀬戸内町は瀬戸内市社会福祉協議会からの依頼であった。

昨年度までの備前県民局協同事業として行った「やんちゃキッズ」を評価して頂き、「学外」を備前県民局から「児童虐待防止のための地域サポート強化事業に係る子育て支援活動事業」として支援して頂いた。厚生労働省の「学生によるオレンジリボン活動」にも参加している。相談窓口の少ない岡山の都市部から離れた地域において、虐待予防の啓発、子連れで参加できる場の提供を目的とした。また希望する保護者に向けて、保育士や助産師にご協力頂いて、子育て相談コーナーを設置した。

備前県民局の「児童虐待防止のための地域サポート強化事業に係る子育て支援活動事業」及び厚生労働省の「学生によるオレンジリボン活動」への参加にあたり、事前に学生を対象に本団体としての活動趣旨及び幼児虐待の現状等の説明会を2回行い、理解を深めた。

昨年度まで、12月にJSD（財団法人日本ダウン症協会）岡山支部のクリスマス会に参加していた。学生にとって、ダウン症児とその保護者に関わることにより、ダウン症についての理解を深める良い機会であった。今年度もJSD岡山支部より依頼があったものの、学内行事と重なったためお断りすることとなった。

2 アンケートの方法及び結果

「やんちゃキッズ」では、保護者と学生に対し、アンケート調査を行っている。

1) 保護者へのアンケートの方法

受付でアンケート用紙を配布し、「やんちゃキッズ」終了時に回収した。アンケートでは、保護者に対し、①子どもの年齢、②子どもとの続柄、③やんちゃキッズのプログラムの内容に関する意見、④今後の参加意思について尋ねた。

2) 保護者へのアンケート結果

以下の結果は、「やんちゃキッズ（4/20、5/25、6/22、9/14）」及び、「学外（和気郡和気町、瀬戸内市長船町）」で得られたデータに基づくものである。協力してくださった保護者の数は、664名であり、例えば夫婦で回答している場合など、複数の回答者によって答えられたアンケートも含まれ、回収されたアンケートの総数は590件であった。

i. アンケートの記入者と子どもの関係

アンケート記入者と子どもの関係について、表3に示す。引率者の多くは、母親であり（72.6%）、次いで父親（16.7%）、祖母（3.3%）の参加が多かった。アンケート記入者のうち、夫婦で一緒に回答しているケースが68件（11.5%）あり、父もしくは母と一緒に祖父母が回答しているケースは、11件（1.87%）であった。

表3 引率者の割合

	人数	割合 (%)
母親	510	76.8
父親	117	17.6
祖母	23	3.5
祖父	6	.9
その他	8	1.2
合計	664	100.0

ii. 子どもの年齢について

1世帯辺りの子どもの参加人数は、全体の55.2%が1人、36.5%が2人、5.6%が3人以上であった。子どもの総数は866人となっており、年齢の分布は、表4の通りである。全体として、最も多いのは1～3歳未満の子どもであり、全体の50.7%を占めている。

表4 参加した子どもの年齢

年齢	人数	割合 (%)
1歳未満	110	12.7
1-2歳未満	207	23.9
2-3歳未満	232	26.8
3-4歳未満	117	13.5
4-5歳未満	86	9.9
5-6歳未満	62	7.2
6歳以上	52	6.0
合計	866	100.0

iii. プログラムについて

①全体の時間について

やんちゃキッズは、90分間のプログラムで開催している。プログラムの長さについて、参加者の印象を図6に示す。参加者の84.3%がちょうど良いと答えており、プログラムの長さは適切であることが示された。

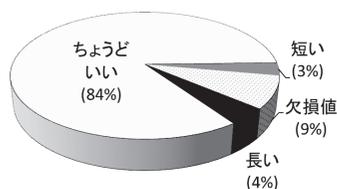


図6 プログラムの長さ

②特に良かったと思うプログラム

アンケートでは、良かったと思うプログラムについて、保護者と子どもにも回答を求めた（複数回答可）。保護者と子どもが選んだ良かったと思うプログラムを表5に示す。

昨年に引き続き交

表5 特に良かったと思うプログラム

流広場を良かったと

答える保護者 (60.2%)

と子ども (53.6%) が

多かった。また、昨

年度に比べ、リズム

体操の選択率が、高くなっている傾向が伺える（昨年度、22.4%）。リズム体操については、『健康・保健』のテーマのもと、学生と子ども達が一緒に踊ることができるように促す工夫がなされるようになってきており、そのことによって、好印象に受け取られたのではないかと推察される。

	手遊び	パネルシアター	リズム体操	オペレッタ	身体測定コーナー	交流広場
保護者による選択数	165	98	291	155	67	356
割合 (%)	(27.92 %)	(16.58 %)	(49.24 %)	(26.23 %)	(11.34 %)	(60.24 %)
子どもによる選択数	83	36	158	82	27	317
割合 (%)	(14.04 %)	(6.09 %)	(26.73 %)	(13.87 %)	(4.57 %)	(53.64 %)

* 複数回答を含む

iv. 今後の「やんちゃキッズ」への参加意思について

図7に示す通り、保護者に対して「今回のような企画があれば、また参加したいと思いますか？」と尋ねた結果、ほとんどの参加者が、参加したいと「思う」と回答した。地域の子育てを支援する継続した取り組みとして、本活動がますます期待されているものと思われる。

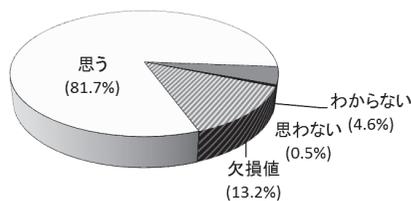


図7 今後の参加意思

3) 学生の振り返りのためのアンケートの方法

本アンケート調査は、学生自身が活動を振り返り、さらに問題点を抽出し、次回以降の「やんちゃキッズ」に活かすきっかけとすることを目的にしている。「やんちゃキッズ」終了後の反省会の時間に、学生にアンケート用紙を配布し回収した。質問紙は、①公演について振り返り（11項目）、②交流広場（子どもとのふれあい）に関する振り返り（10項目）、③全体に関する満足度の振り返り（2項目）の23の振り返り項目から構成されている。各項目について「あてはまる（5点）」「少しあてはまる（4点）」「どちらでもない（3点）」「や

やあてはまらない (2点)」「あてはまらない (1点)」の5件法にて回答を求めている。加えて、公演と交流広場での活動それぞれに関し、学生がどのような課題を意識するようになったかについて自由記述による回答を求めた。7月の「やんちゃキッズ」までは、1年生と2年生の混合で実施し、9月の「やんちゃキッズ」及び「学外」では2年生の長期学外実習のため、1年生のみで実施した。各回でアンケートに回答した学生数は、4月 (72名)、5月 (79名) 6月 (64名)、9月 (39名)、学外やんちゃキッズ (25名) であった。

4) 学生へのアンケートの結果について

i. 調査項目の因子分析と全体的満足度との関連

質問項目の集約と今後の改善を目的に、公演に関する10項目と、子どもとのふれあいに関する9項目について、主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った。その結果、固有値の変化量 (5.71、1.95、1.53、1.11、0.97、0.88) 及び因子の項目の解釈可能性から3因子による解釈が妥当であると判断した。回転前の累積説明率は、48.45%であった。因子分析の結果を表6に示す。

表6 因子分析の結果

	交流	公演	課題
積極的交流による学び			
子どもと積極的に交流できた	.73	.00	-.22
子どもについての理解が深まった	.70	-.06	.12
自分も楽しく参加できた	.63	.00	-.13
子育て支援への理解が深まった	.59	.01	.19
他人の立場や気持ちをくみ取れるようになった	.58	.04	.06
自分に自信が持てるようになった	.56	.08	.12
保護者・高齢者と積極的に交流できた	.54	.02	-.08
遊びのレパートリーが増えた	.51	-.01	.11
公演の充実			
みんなと協力することができた	.07	.63	-.13
積極的に活動できた	.16	.59	-.17
人前で演技することが上手になった	-.08	.59	.24
臨機応変に行動することができた	.10	.56	-.04
事前準備・練習がよくなった	-.15	.54	.05
意識して笑顔ができた	.10	.49	-.10
自分自身で創意工夫した	.16	.48	.10
保育に関する技術が身についた	.17	.44	.17
課題発見			
新たな課題が見つかった	-.15	.18	.69
新たな課題が見つかった	.21	-.27	.54
	積極的交流による学び (.82)	.54	.24
	公演の充実 (.81)		.26
	課題発見 (.56)		

第1因子には、交流広場（子どもとのふれあい）に関する振り返りに関する項目のうち、「新たな課題が見つかった（交流広場）」という項目以外すべての項目が負荷していた。第1因子について負荷量の大きい項目から、「積極的交流による学び」因子（以下では、交流と記す）」と命名した。同様に、第2因子には、公演について振り返り（11項目）のうち、「新たな課題が見つかった（公演）」以外のすべての項目が負荷していたことから、「公演の充実」因子（以下、公演と記す）」と命名した。

表7 記述統計量と1サンプルのt検定

	交流	公演	課題	満足度	平均値	標準偏差	n	1サンプルのt検定
交流	1.00 ***	.46 ***	.34 ***	.35 ***	4.06	(0.48)	275	t(265)=29.94 ***
公演		1.00 ***	.17 **	.39 ***	4.10	(0.51)	276	t(274)=36.23 ***
課題			1.00 ***	-.12	4.22	(0.75)	276	t(275)=36.04 ***
満足度				1.00 ***	4.29	(0.70)	266	t(275)=26.89 ***

1 サンプルの t 検定では、「3 : どちらでもない」を基準にしている

最後に、第3因子は、新たな課題への気づきが負荷しており「課題発見」因子（以下、課題と記す）と命名した。各項目についてのクロンバックの α 係数は、交流 ($\alpha = .82$)、公演 ($\alpha = .81$)、課題 ($\alpha = .56$) であり、課題因子 (.58) については比較的係数が小さく質問項目を補充するなどの改善の余地が認められたが、全体的な信頼性は概ね妥当なものであった。

因子ごとに求めた尺度得点および、学生の満足度に関する項目の記述統計量について表7に示す。1サンプルのt検定を用いて、“3：どちらでもない”という回答と比較したところ全ての項目について、学生は有意義であると回答をしていた。また、交流 ($r = .35$) および公演 ($r = .39$) の得点は、満足度と有意な正の相関が認められた。

ii. 1年生の取り組みの経時的分析

2年生の長期学外実習のため、「やんちゃキッズ」は、9月からは1年生が主となって活動する。9月は、定例の「やんちゃキッズ」のほかに「学外」も開催され、1年生は試行錯誤しながら急激な変化を見せる時期である。「やんちゃキッズ」及び、「学外」の開催ごとのアンケート項目の記述得点について図8に示す。振り返りアンケートにおける、学生の交流、公演、課題得点および、活動全体に対する満足度の尺度得点を従属変数とし、測定時期を独立変数とした多変量分散分析を行った。その結果、多変量検定における Pillai のトレースの値は $.25(F(16, 608) = 2.50, p < .001)$ であり、有意な値を示したため、個別の従属変数に関する分散分析と多重比較を行った。その結果、満足感 ($F(3, 118) = 3.8, p < .05$) のみ開催時期の主効果が有意であった。次いで、*Tukey HSD* による多重比較を行った結果、初めて1年生のみで行った9月のやんちゃキッズと学外やんちゃキッズにおいて、満足度が有意に低下していた。2年生から世代交代後、顕著に満足感が低下する傾向は、昨年度(2012)年度の分析によっても同様に認められている。満足度についての事後分析として、H24年度入学生と今年度(H25)入学生の比較を行った。満足度を従属変数、入学年度と開催月を独立変数とした 2×2 の分散分析を行った結果(図9)、入学年度の主効果は認められず、全般的な満足度には昨年度と有意な差は認められなかったが、開催月と入学年度の交互作用が有意傾向を示し ($F(3, 237) = 2.34, p < .10$)、単純効果の検定においては学

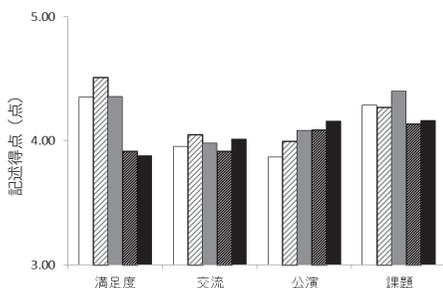


図8 1年生の取り組みの時系列的変化

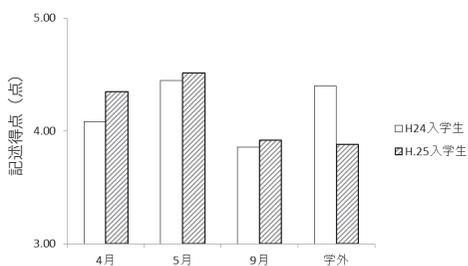


図9 入学年度による満足度の比較

外やんちゃキッズ後の満足度について有意な差が認められた $F(1, 237) = 5.49, p < .05$)。昨年度においては、学外やんちゃキッズ後のアンケートにおいて、一度低下した満足度が、以前の水準に回復増加したが、今年度の学生においては、学外やんちゃキッズ後も世代交代に戸惑うようす様子が伺える。10月以降のやんちゃキッズにおいて、どのように学生が変化していくかについて、十分に留意していく必要が伺えた。

おわりに

2013年度の活動を今年度の課題に従って、次のように考察及び統括をし、今後の課題を提示する。

1 今年度の課題の達成状況

1) 増加する参加者への対応と安全確保

2011年度及び2012年度と参加者が増加傾向にあり、学生スタッフの不足及び子ども一人辺りの遊ぶスペースの減少等による子どもの怪我や事故について懸念していた。しかしながら、図10に示す通り、今年度の参加者は減少傾向にあった。この背景に、2011年度及び2012年度は備前県民局の協働事業として実施していたため、本学科の広報活動に加えて、

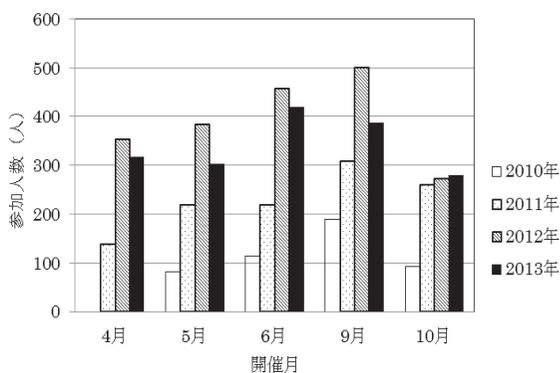


図10 やんちゃキッズ参加者の年次推移

備前県民局の広報活動もあり、備前県民局管内及び各報道機関を通して広く周知されたが、今年度は本学科のみの広報活動であったためと予測する。今年度は様々な場面を想定した危機管理マニュアルの作成まで至らなかったが、やんちゃキッズの準備・実施中に危険が予測される場面や行為を教員が見かけた際には注意を促すようにし、反省会時に保護者アンケートに危機・安全管理に関する内容が書かれていた場合には、その都度学生に伝えるよう心掛けた。

2) 学生間の協力体制

昨年度より、各学生の役割を明確にし、責任を持って遂行できるよう係の分担を行っている。昨年度は、「自分の係以外の作業を手伝わない」や「仕事量の差」等の学生不満があり、学生間の協力体制が課題となった。GBAに所属している学生は、それぞれの公演活動を円滑に実施するために、2つのグループに分かれており、さらに準備・片づけや交流広場時の係に分担される。加えて、「やんちゃキッズ」はGBAの学生だけでなく、中四国保育研究大会に参加する学生も活動している。今年度は、年度初めの全体ミーティン

グにおいて、より良い「やんちゃキッズ」の実現に向けて、文書と口頭にて周囲との協力の重要性を伝えた。学生の振り返りアンケートに、自分より忙しい係を手伝うことができなかつた反省などが綴られるようになり、少しずつ改善されていると感じる。

本学科は3年前より共学になっている。今までにも男子学生が「やんちゃキッズ」に参加することはあつたが、女子学生の方が圧倒的に多く、また協力体制などの横のつながりも円滑な「やんちゃキッズ」の実施に必要であるため、なんとなく馴染みづらい状況があつたように感じる。しかしながら、今年度の学生（H25年度生）については、男子学生も積極的及び主体的に参加し、建設的な意見を述べる等、良好な役割分担のもと実施できている。

3) 著作権及び死を扱うプログラムの公演の仕方

昨年度に引き続き、今年度も「死を扱うプログラムの公演の仕方」は課題である。4月に行ったオペレッタ「3びきのこぶた」において、学生は自分達の判断により悪者のオオカミの扱い方を原作と変更した。本番まで日が無く、修正ができなかつたため「3びきのこぶた-就実バージョン-」として実施したが、教員間でも内容が問題となった。当日の保護者アンケートにはこの件に対する意見や苦情は無かつた。しかしながら、現在多くの参加者に来て頂いている中、保護者も様々な価値観や教育観、子育て観を持っているものと予測する。学生にとつても、学生の間は保育の基礎を習っている時期であり、将来保育者になった際に、基本（原作）を理解した上で変更やアレンジを加えることを選択する、またそれを周囲に説明することができるかが、信頼される保育者につながると考える。そこで、5月のリハーサル時の反省会において、「やんちゃキッズ」の公演方針は、『原則、基本に忠実である』ことを伝えた。前述した通りの理由を伝え、演目の選択を慎重に行うこと、台本を早めに教員に提出することも求めた。本件については、今後もサポートが必要である。

2 今後の課題

1) 全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境作り

母親以外の父親、祖母、祖父が子どもを「やんちゃキッズ」に連れてくるケースが増えている。昨年度、母親が引率している割合は85.5%であつたが、今年度は72.6%に減少している。特に父親の引率が増えており、昨年度総数40名であつたのが今年度は117名に増加している。昨年度の時点で、父親や祖父がおむつ交換コーナーを使用しやすいように、授乳室とおむつ交換コーナーを仕切りによって分けた。一方で、トイレは自立しているものの、補助が必要な子どもに対して、学生の援助が必要であると考え。本学体育館内のトイレは、構造上男性用が極端に少ないため、学生が援助して女性用トイレに引率するなどの工夫が必要である。祖父母が引率している場合など、子どもの活発な移動に同行でき

ていない場合がある。今年度単発的に、『折り紙コマの折り方講座』を行った(図11)。折り紙コマは交流広場において人気のある遊びであり、受付にて折り方について図示したものを配布している。多くの保護者と子どもが参加しており、子ども達は真剣に学生から折り方を習っていた。子どもも集中して折り紙をすることができるため、引率者にとっても息をつける講座



図11 折り紙コマの折り方講座の様子

であったと考える。加えて、参加人数が多い回での「やんちゃキッズ」では、動き回る子どもの数を講座への参加によって抑制することができるため、安全面も配慮して意識的にこのような講座を行うことも今後の課題である。

今年度の「学外」において、『子育て相談コーナー』を設置した。昨年度もイベント的に1度のみ『子育て相談コーナー』を設けたが、交流広場の間、相談者が途切れることなく訪れた。今年度の「学外」においての相談件数は全4件であった。地元での開催であり、また今回は「虐待防止」の事業としても展開しているため、他者に見られたくないというような気持ちがあり、相談しづらかったのかもしれない。しかしながら、少数であっても相談を受けたい保護者がいる事実を目に向け、今後も我々が実施可能な方法を模索して子育て支援強化に努めたい。

2) 公演演目の決定と内容の確認について

今年度、演目の決定について「原則、基本に忠実である」ことを学生に伝えた。しかしながら、学生は話の盛り上がる所に意識が向かい、終わり方まで全体的に考慮した演目の選択ができない場合がある。例えば、今年度9月に行った「おむすびころりん」は、悪いおじさんがネコの鳴きまねをしてネズミが大騒ぎになるところまでは盛り上がるが、最後おじさんが暗闇で右往左往するといった終わり方であり、なんとなく暗い雰囲気が終わってしまった。9月は1年生だけの公演活動となり、まだ演技力が低く、学生は演じきれていなかったように感じる。今後は、学生の公演の経験数なども踏まえて演目決定の助言が必要である。合わせて、「やんちゃキッズ」当日までのスケジュールリングを行い、教員への早めの台本提出と校正を徹底するようにしたいと考えている。

謝辞

2013年度の子育て支援ボランティアグループG B A及び「就実やんちゃキッズ」の活動は、平成25年度就実大学・就実短期大学学術・文化・スポーツ奨励金を受け実施した。加えて、「学外就実やんちゃキッズ」は、岡山県備前県民局「児童虐待防止のための地域サポー

ト強化事業に係る子育て支援活動事業」として支援を受け、活動を充実させた。記して深謝致します。

引用文献

- 1) 村田恵子、澤津まり子、立石あつ子 (2006). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－備前地域子育てキャラバン事業報告－、就実論叢、36 (社会篇)、pp.135-152.
- 2) 澤津まり子、永田彰子、田中誠、立石あつ子 (2007). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2007年度活動報告－、就実論叢、37 (社会篇)、pp.81-98.
- 3) 澤津まり子、堤幸一、立石あつ子、伊藤真、笹倉千佳弘、田中誠、永田彰子、山根薫子、Z.山田章子(2008). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2008年度活動報告－、就実論叢、38 (社会篇)、pp.285-298.
- 4) 澤津まり子、伊藤真、堤幸一、立石あつ子、笹倉千佳弘、Z.山田章子、田中誠、山根薫子 (2009). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2009年度活動報告－、就実論叢、39、pp.233-247.
- 5) 澤津まり子、立石あつ子、柴川敏之、秋山真理子、堤幸一、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子 (2011). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2010年度活動報告－、就実論叢、40、pp.163-172.
- 6) 澤津まり子、柴川敏之、松本希、鎌田雅史、Z.山田章子、秋山真理子、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子 (2012). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2011年度活動報告－、就実論叢、41、pp.175-186.
- 7) 松本希、柴川敏之、澤津まり子、鎌田雅史、田中誠、秋山真理子、Z.山田章子、笹倉千佳弘、山根薫子 (2013). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2012年度活動報告－、就実論叢、42、pp.161-174.